

あいさつ行動の社会学的考察

—日常コミュニケーションの視点から—

安達正嗣

1 あいさつ行動へのアプローチ

世界のなかで、あいさつという行動様式をもたない民族はいないであろうと言われている。それぞれの民族が、いかなる時代でも何らかの言語的および非言語的表現によって、あいさつをおこなってきたわけである。通常われわれは、現在でも暮らしのさまざまなつきあい場面の初めと終わりにおいて、何らかの言葉や動作を用いている。あいさつ行動は日常生活において深く浸透しており、人びとの日常生活のコミュニケーションのなかで欠かせない重要な部分となっていると思われる。

本章は、日常コミュニケーションの視点からあいさつ行動に焦点をあてて社会的に考察することをつうじて、わが国のつきあい文化の変遷や特徴も明らかにし、コミュニケーション研究の展望を探ることを目的とする。なお、一口にあいさつ行動と言っても、いつも学校で会う友人へのあいさつ、あるいは中元や歳暮といったモノを媒介にした贈答によるあいさつなどと広範囲なものが想定されるが、ここでは主として日常生活のなかで直接的に出会う対面的状況においておこなわれるものを考察の対象としている。

あいさつ行動の本質的意味

ところで、あいさつとは何であろうか、なぜそのような行動をするようになったのであろうか。その答えとして、しばしば引用されるのがスペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットによる説明である。彼によれば、あいさつはもともと合理的な行動ではない。われわれは生まれたときから特定のやり方にしたがうようになっており、そこには各人の創意を加えたり自発性を発揮したりする余地はなく、行動の内容を理解しているわけでもないのである。そこでオルテガの結論としては、人間はかつて野獣であり、いまでもその状態は多かれ少なかれ続いており、とくに近年までは人間同士の接近にはしばしば危険がともなってきたので、お互いに接近するために用いるテクニックが必要であった。これがあいさつ行動となったわけである。つまり、あいさつ行動の本質的意味は、それによって相互の攻撃性を弱めることにある。それをおこなうこと自体に意味があるということである。あいさつ行動の内容の意味は、慣習化されていくことにより、しだいに忘れ去れてしまい、今ではふだんの暮らしのなかで意味を考えてみることはほとんどない。したがってあらためて意味を問われると、あまりにも身近な慣習的行動となっているだけに、難しい問題と感じてしまうことになるわけである。

動物行動学からの研究

近年になって発展してきた動物行動学による研究成果は、このオルテガの説を裏づける結果を示している。とりわけI・アイブル＝アイベスフェルトは、世界各地の民族の日常行動を観察してまわりながら16ミリ映画に撮影するなどして記録し、それらの資料を中心にしながらあいさつ行動などを分析することによって、人間の基本的行動様式を明らかにしようとしたことで有名である。彼は、K・ローレンツが動物の行動を観察することによって攻撃性とそれを抑制する行動様式を見だし、さらに人間との比較をおこなった方法をより発展させている。人間が攻撃性を抑制・回避する行動パターンを探り、この典型的なものとしてあいさつ行動をとらえているのである。たとえば微笑、眉をあげる動作、うなずきやおじぎ、握手、抱擁、鼻をならしかぐ動作などがあり、それぞれに民族によっても違いがみられる。

このように人間のあいさつ行動は多種多様である。しかしアイブル＝アイベスフェルトによれば、そこには同一の行動パターンが見いだせる。その共通する機能は、相手の攻撃的行動をなだめたり、人と人との結びつきを確立したり維持したり、またときには威圧的な自己表示をすることで相手よりも上位にあることを示したりするのである。ここから彼は、他の動物たちと同様に、人間の生得的な基盤があいさつ行動にはあると仮定できると述べている。

ゴフマンのあいさつ行動論

つぎに、われわれが日常的におこなっている対人間コミュニケーションのなかで、あいさつ行動がどのように位置づけられるのかを探ってみたい。しかし対人間コミュニケーションのひとつとして、あいさつ行動を考察している研究者はほんの一握りにすぎない。この代表的存在としては、アメリカの社会学者E・ゴフマンがあげられる。ここでは、彼のあいさつ行動論を少し詳しくみていくことにしよう。彼は、日常生活をドラマにたとえて、人びとが他者に対していかに自己を演出しながら行為をしているかを研究対象とする独自のドラマ論的アプローチの立場をとっている。そうした観点から、対面的状況のなかにあらわれる相互作用儀礼に注目していくなかで、公共の場所におけるあいさつ行動などの日常行動を取りあげて分析しているのである。

ゴフマンは、E・デュルケームの消極的儀礼と積極的儀礼という宗教儀礼の分類を日常生活の対面的状況の対人儀礼、すなわち相互作用儀礼に適用し、回避儀礼と呈示儀礼に分けている。回避儀礼とは、対面的状況に応じて相互の接近を回避するためのものである。お互いに知り合いではないことをあらわして接近を避けるための行動は、儀礼的無関心とよばれている。これは、いわゆる見て見ぬふりをして他者の存在に対して無関心を装う自己演出（パフォーマンス）であり、わざと避けたのではないことをあらわす意味もある。いっぽう呈示儀礼は、個人間の社会関係に応じておこなうことを期待された敬意をともなう自己演出であり、支持的儀礼、ならびにそれに含まれる接近儀礼に象徴的にあらわれている。

支持的儀礼と接近儀礼

支持的儀礼は、相手との社会関係や人間関係を支持（維持）することをあらわすためにおこなう自己表現である。この典型的形態が、あいさつ行動なのである。ゴフマンによれば、支持的儀礼としてのあいさつ行動は、それが生じる社会的接触の場面によって3つに分けられる。

第1は、通りすがりのあいさつ行動である。これは、日常生活で友人などに会ったときに路上などでおこなわれ、言葉や動作がルーティーン化されている。また、頻繁に会う相手に対しては関係を支持する必要性がうすくなるので簡略化される傾向にある。たとえば、言葉を省いて目くばせをしたり少し笑うだけで用が足りることになる。第2は、驚きのあいさつ行動である。予期しないところで、知り合いに偶然に出会って困惑した状況でおこなわれるものである。相手との関係が壊れないように、何らかの反応を示すことが求められるのである。たとえば、電車内などで家族に会ったときなどがこれにあてはまる。あらためて関係を支持する必要がないので、どういった行動をとればいいのか戸惑うわけである。第3は、パーティなどといった、あらかじめ設定された場面でのあいさつ行動である。そこでは、お互いの関係を再確認しあったり、新しい関係を結んだりするために、支持的儀礼としてのあいさつ行動が盛んにおこなわれることになる。このように、出会いの場面が設定されているか否か、または出会いが予期されるか否かによって対面的状況が分けられて、あいさつ行動が分類されている。

さらに接近儀礼では、相手との接触の可能性および親密度という観点から、出会いと別れという両面であいさつ行動がとらえられている。たとえば、友人には「やあ」という言葉を使ってもよいが、それほど親しくない相手には不適切となり、同じ友人でも久しぶりに会ったようなばあいには「久しぶり、元気だったか」といったもう少し大げさな表現が使われることになる。別れのあいさつでも、すぐにまた会えるのか、しばらくあるいは永久に会えないかといった接触の可能性によって表現の仕方が異なっている。つまり人びとが、相手との関係の時間的変化も考慮しながら、あいさつ行動を使い分けている点を明らかにしているのである。

このようにゴフマンは、日常の対面的状況の相互作用秩序を探るための典型的な相互作用儀礼として、あいさつ行動を研究している。彼は、かつて社会学者G・ジンメルが社会を人びとの相互作用の集合体としてとらえて分析したように、こうした些細な日常行動の分析から相互作用秩序を見だし、さらにはそれらの積み重ねから現代社会の社会秩序の構成を明らかにしようとしたのである。

あいさつ行動のプロセス

出会いから別れまでのあいさつ行動の一連のプロセスについては、人間行動学者のケンドンとファーヴァーが詳細な調査研究をおこない、より具体的な事例をあげて分析している。彼らの調査方法は、アパートでのパーティやピクニックなどの様子をビデオテープあるいはフィルムに収録して、あいさつ行動の事例を集めるという観察法である。それらの事例から、距離の離れたあいさつと近接したあいさつのプロセスにみられる表現の相違が明らかにされている。距離の離れ

たあいさつでは、まず頭をぐいと上げて呼びかけ、頭を低くして笑い、顔を傾けるようにして近づくことになる。この後に、近接したあいさつとして、一般に5フィート以内で相手に顔をむけて立ち止まり、そのまま会話にはいるばあい、あるいは握手や抱擁などの身体接触がおこなわれるばあいがある。こうしたことから、あいさつ行動の一般的なやりとりには、前段階として「相手をそれと認めること」および「告知」、そのなかに「距離の離れたあいさつ」、「接近の段階」、「近接したあいさつ」などの段階が含まれることを見いだしているのである。

さきに述べたゴフマンの研究も、ケンドソンらと同様に、現代のアメリカ社会の白人中産階級を対象とした参与観察調査から得たデータを基準にして論じているが、基本的には日本社会にもあてはまるものと思われる。もちろん、あいさつ行動はそれぞれの社会で歴史的背景ならびに文化的背景をもっているので、さらにそれらについて探っていく必要がある。つぎの第2節では、村落社会から都市社会への移り変わりのなかでのあいさつ行動の変化をたどり、第3節では比較文化的な視点から、わが国のあいさつ行動の特徴を明らかにしていきたい。

2 社会の変化とあいさつ行動

村落社会のあいさつ行動

よく指摘されるように、われわれがかつて村落社会で暮らしていた時代には、地縁の関係が重視され、同じ村落内の人びととのつきあいは必要不可欠なものとなっていた。そこでは共同作業や相互依存性がつねに求められることから、日常コミュニケーションによって地域社会の凝集性を高めることが重要となったのである。

村落社会の時代においては、日常生活のなかで、どのようなあいさつ行動がおこなわれていたかは、民俗学者の柳田国男が詳しく論じている。柳田によれば、元来「挨拶」は禅僧によって中国から輸入された近世の漢語である。「挨拶は押す、拶は押し返す」ということであり、問答や応答といった意味をあらわしている。それが一般的に使われるようになった近代までは、ふだんの暮らしのなかで使う用語としては「言葉や声をかける」、あるいは名詞形では「物言い（モノイイ）」という言葉が用いられていたのである。現在では物言いと聞くと、相撲において行司の判定に対して審判員がクレームをつけることなどを思い浮かべるぐらいであろう。あいさつ行動で用いられる共通の題目は、平凡な飲食、労働や勤勉、天気の良い悪いであった。とくに労働や勤勉についての言葉は、農業主体の社会であっただけに多く使われていたようである。たとえば、早朝の言葉として現在でも使われているオハヨウという言葉は、早起きして働いている相手の勤勉さを感嘆する意味からきている。またオシマイナは、一日働きどおしだから早くしまうほうがよいという思いやりをあらわしている。オツカレは、相手の労働に対するねぎらいの言葉である。いずれにしても、労働への賛美やねぎらいを意味する言葉が主にあいさつとして使われていたのである。

このように、かつての村落社会では、お互いにあいさつを交わしあうことは、労働の苦勞をねぎらったりするなどして良好な人間関係を保ち、村落社会の共同体意識を高めてコミュニティの

結合を維持していくという社会的機能をはたしていたと言えるのである。

しつけとあいさつ行動

村落社会のつきあいの第一は、すでに述べたとおり、他人に会ったり見かけたりしたときには必ず声をかけ、あいさつすることである。見知らぬ人のいない村内にあっては、しないことの許されない行動となっていた。したがってあいさつ行動は、村人として一人前であるかどうかを見極める基準のひとつともなっており、一人前になるための重要な訓練事項に入っていたのである。村人として認められるには、日常のさまざまなつきあい場面であいさつ行動を的確にできることが問われたわけである。

それは、幼児期および児童期のしつけをつうじて身につけられていくことになる。一般に、村落社会でしつけの良い子どもというのは、行儀・仕事・あいさつができる能力のある者を意味していた。こうしたしつけのエージェント（担当者）は主に母親であるが、他人もしつけを促進することになる。家を訪れる他の村人の目に、または道ばたでも多くの村人の目に、子どものあいさつ行動はさらされており、幼少年期には親などの家族だけでなく、他人によってもしつけられるのである。教え込まれる事柄としては、それぞれに地域差がみられるが、通り過ぎる側から必ず声をかけねばならないこと、それがタイミングよく適切にできることなどが共通するところである。道で他人に会ったばあい、用件があって他人の家を訪問したばあい、それぞれの場面に応じたあいさつ行動ができることである。日常のしつけ場面は数多くあるが、たとえば他の家の風呂を借りに行く「もらい湯」の習慣などをつうじておこなわれていた。幼いときには親に連れられていくが、少年時代になって親と離れてひとりで行くときには大声で行き帰りのあいさつ言葉言うことが必要となる。こうしたあいさつは、母親やその家の主婦が教えていたようである。

村落社会においては、家を基本単位としたつきあいが重要視されていたので、とりわけ将来に家を代表する跡取りになる子どもに対するしつけは、きびしくおこなわれたようである。村のルールを知る初期段階であるとされていたからである。あいさつによる子どものしつけの目的は、村落共同体意識の育成であり、さらには上下関係などの社会関係を認識させることにあったのであろう。

なお、日常生活における家族同士のあいさつについては、他人行儀なことであるとも考えられていたが、しかしかつての農家では家族や親族などの血縁者だけでなく、農作業の手伝いなどの非血縁者が同居していることも珍しくはなかった点を考えるならば、他人の目は家庭内にもあり、子どもに対するしつけとしてあいさつ行動もおこなわれていた可能性は大きいと言える。

都市社会のあいさつ行動

1950年代半ばから始まった、いわゆる高度経済成長以後の産業化と都市化は、村落社会でみられたようなつきあいを急速に消滅させていく。郡部では過疎化がすすみ、いっぽう都市部の過密化が問題となり、大都市周辺では新興住宅地や高層団地群などが続々と出現していったのである。

そこでは、隣近所のつきあいが希薄になり、あいさつ行動も必要なくなってくることになる。

こうした状況を作家のなだいなだは、「こんにちはじいさん」という小説に的確にあらわしている。それは、大都市郊外のニュータウンを舞台にして、近所の団地や住宅の主婦たちに対して誰彼なく、「こんにちは」とあいさつをしてまわる高齢の男性が登場する。周りの人びとから気味悪がられ、ついには病院に入れられてしまうという皮肉な小説である。主人公の男性は、かつてその地域が農村であったところからの居住者であり、新しい住民に対するあいさつを当然と考えている。いっぽう新住民である主婦たちにとっては、同じ地域に居住していることはあまり意味をもっておらず、近隣の見知らぬ他人にあいさつをする必然性は認められないのである。ここに描かれているのは、さきに述べたような、あいさつの適切さによって村人として一人前かどうかが決められた時代とは様変わりした世界である。

ゴフマン流に言うならば、現代の都市的な生活状況のなかでは、地域社会においても儀礼的無関心を装うことが、むしろ日常的な相互作用儀礼として定着してきていることになる。かつてのように、子どもにしつけとして地域社会でのあいさつを熱心に教え込むことはなくなったのである。逆に、誘拐事件などに巻き込まれないためには、子どもに対してたとえ顔見知りの人からあいさつをされても近づかないように教える必要すら出てきている。また、家庭内においても、他人が同居しているようなケースはほとんどなくなり、親と子どもというひじょうに身近な血縁者だけになってきたこと、さらに家に近隣の人びとが訪ねてくる機会も減少したことなどから、ふだんの暮らしであいさつ行動は少なくなってきたようにみえるが、はたしてそうであろうか。

筆者が最近、郡部に居住する八十歳代の男性高齢者に対して生活史に関するインタビュー調査をしていた際に、「近ごろでは、営業的な・形式的なあいさつばかりが目立つ」という感想をもらっていたことが印象に残っている。確かに現在では、かつての村落社会でおこなわれていたようなつきあいはなく、隣人に労働へのねぎらいの言葉をかける必要もなくなったのである。しかし加藤秀俊が指摘したように、都市社会となった現代のわが国は、人間関係処理業の時代にある。血縁や地縁といった限られた範囲ではなく、職業関係などにもともなう社縁の世界が増大し重要視されており、それにもなって拡大したつきあい範囲に対応するための社交術が次々とあらわれてきた。お互いに相手を確認するための名刺はサラリーマンの必需品であり、交換の仕方なども完全にマニュアル化されている。職業上のつきあいだけでなく、さまざまな見知らぬ他者とのつきあい場面であいさつ行動が求められてきており、さらには戦略的、意識的にあいさつを表現することすら必要となっている現代的状況があると言えるであろう。

3 比較文化からみたあいさつ行動

言語からの比較研究

あいさつ行動に使われる言語を考察した比較文化的な研究から、わが国の特徴を考えてみよう。

言語社会学者の鈴木孝夫は、あいさつ言葉を3つに類型化し、欧米諸国との相違を明らかにしている。第1のタイプは、人に出会ったときの「やあ」というような言葉である。一般に短く、

ほとんど具体的な言語的内容はもっていない。日本ではそうした言葉はとくに親しい者にしか使わず、コミュニケーションの場に引き入れる糸口となる一種の合図でもある。第2のタイプは、「おはよう」、「こんにちは」、「さようなら」といった多少の意味内容をもっているような定型的なあいさつ言葉である。欧米では日本と異なり、宗教的な意味が変形してあいさつ言葉になったものが多いとしている。第3のタイプは、スピーチや祝詞などといった、いわゆる「ごあいさつ」である。鈴木によれば、このタイプは、日本人の言語生活のなかで、演説や講演会などといった一对多の言語使用の長い歴史と伝統に欠けているために、充分に発達していないものであり、わが国のあいさつ行動の特徴をあらわしている。

いっぽう文化人類学者の野村雅一は、「おはよう」や「こんにちは」などのあいさつ言葉、あるいは「ありがとう」や「ごめん」などの感謝・詫びの表現といったちょっとした軽いあいさつ行動が発達していることが日本社会の特徴であると指摘している。鈴木のカテゴリで言えば、第2のタイプである。欧米諸国だけでなく、同じアジア諸国でも中国や韓国には上下関係などをあらわす込みいった厳格なあいさつはあるが、知人どうしが気軽に交わすあいさつの習慣はあまりないものである。

村落社会のあいさつ言葉について柳田国男が述べたように、わが国では相手に対する声や言葉をかけることが、労働などと結びついて長期にわたり習慣化してきたというつきあい文化の歴史をもっている。つまり、こうしたことが他の文化に比べてときには、現在でもわれわれの日常のあいさつ言葉の豊富さに反映されているのではないかと考えられる。

しぐさからの比較研究

しばしば文化人類学者や民族学者は、あいさつ行動で用いられる非言語、すなわちしぐさに対して大いに関心をむけている。日本と欧米とのしぐさの違いで頻繁に比較されて取りあげられるのが、お辞儀と握手である。

しぐさ論の古典ともなっている『しぐさの日本文化』のなかで、多田道太郎は、日本人のマナーとして相手に対して低姿勢であることが必要であり、なだめ、服従、謙遜といった態度を示すことが重要となっていることを述べている。あいさつ行動におけるお辞儀は、その典型的な表現である。お辞儀という行動が欧米人には奇異にうつることは、よく知られている。たとえばアメリカ人にとっては、彼らの平等的精神からすれば、過度に服従的またはフォーマルすぎる行動として受け取れるものであり、握手を中心とした日常生活のなかではほとんどみられないからである。いつごろからお辞儀がおこなわれるようになったかは不明であるが、文化的比較からみると、日本人のあいさつ行動においてもっとも特徴的なものであることは間違いのないであろう。

身体接触からみたしぐさのカテゴリでは、お辞儀を中心とした非接触文化には日本、中国、インドなどが含まれ、握手や抱擁などの接触文化には欧米諸国やアラブ諸国などが含まれることになる。わが国のあいさつ行動のしぐさには、現在でも一般的にはあまり握手が普及しているようには思われない。これにはさまざまな説明がおこなわれているが、よく使われる解釈のひとつが日本人

の身体接触に対するタブーの思想である。つまり、身体的接触に対する感覚が文化的に許容されていないのは、暮らしのなかにケガレの観念が存在したからであると指摘するものである。日常生活のなかで身体的接触は、ケガレをもたらす行為として忌み嫌われたいので、現在もこうした意識が残存しているために、握手に抵抗感を感じるという説明である。

しかしながら、欧米人のほうが身体接触には敏感である。路上などで、すれ違うときに手や肩が少しでも触れると、相手に詫げる言葉をかけることがあたりまえとなっている。いっぽうわが国においては、身体接触に関して欧米諸国ほど敏感ではなく、それに対するタブーも少ないとも言われている。したがって逆説的ではあるが、おそらく欧米人にとっては、ふだんは接触を避けているからこそ、あいさつ行動としての握手には友好的な意味がでてくることになるのではないかと考えられる。わが国では、人びとがわざわざ身体接触である握手を取り入れる必要性を感じなかったのではなかったかと思われるのである。また野村も述べているが、お辞儀という形式を発達させていたので、握手がはいっていき余地がなかったこと、さきに述べたように日常のちょっとしたあいさつ言葉が豊富にあったこともあげられる。

ただし文化的な比較研究では、たんにあいさつのやり方だけに注目して民族間で異なることを示しても、個々の事例を明らかにするだけであまり発展性のあるものとは言えない。たとえば文化人類学者の小川了は、あいさつ行動が社会的な上下関係を反映していることに注目し、社会を混乱に陥らせないための高度な文化的行動であると指摘している。彼によれば、わが国において社会の変化にともなった価値の多様化によって、上下の秩序の混乱が生じており、このことが現代のあいさつ行動の混乱に端的にあらわれる。しかし、そうした混乱が社会に活力を与えて社会秩序の再編成にもつながるのである。社会構造や文化構造、さらに重要なことにはその歴史的な変動と関連させて、現在のあいさつ行動を解釈していく必要がある。

4 日常コミュニケーション研究の展望

つきあいの拡大と多様化

本章では、日常コミュニケーションの視点から、これまでの研究成果に基づきながらわが国のあいさつ行動の変遷と特徴を社会学的に考察してきた。それは、あいさつ行動の考察がつきあい文化、さらには生活文化を探る糸口になるものと考えたからである。これまで本章で述べてきたことをまとめると、本質的にはあいさつ行動はお互いの攻撃性を弱め、人間関係や社会関係を維持していく機能をもっていること、わが国の歴史的・社会的変化による村落社会から都市社会への移り変わりのなかで、つきあいの範囲の拡大や多様化があいさつ行動にあらわれていること、文化的な比較からわが国のあいさつ行動における言葉の豊かさとしぐさの特徴を明らかにしたことである。近未来において、国際化や高度情報化の進展などを考えるならば、異文化、異世代、異業種などに接する機会も多くなり、ますますつきあいの範囲の拡大ならびに多様化はすすむであろうことが予測されるのである。

日常コミュニケーション研究の意義

近年、わが国においても社会学などを中心にして、コミュニケーション理論の検討が盛んにおこなわれており、そこから公共の秩序のあり方などに対する理論的な議論が活発化する状況にある。しかしながら、理論の検討や抽象的な議論の枠内だけにとどまっているケースが多くをしめており、現実の生活との結びつけがおこなわれていないような印象を与える。もちろん、理論的研究は重要ではあるが、現実の人びとの日常生活における具体的なつきあいの変化とそうした理論をどのように結びつけ、それによっていかに分析していくのかは、今後の大きな課題になっていると言えるであろう。たとえば具体的な調査研究としては、村落社会から都市社会への歴史的移行を体験した世代、つまり現在の高齢者世代を対象として、これまでの人生で彼らの周辺で起こったあいさつ行動の変化などをたずねるような、つきあいをめぐるライフヒストリー調査は、人びとの生活文化およびそれに対する意識の歴史的な変遷を探るうえで、有益なデータを与えてくれるのではないかと考えるのである。あいさつなどの日常の些細な行動に関心をもち、つきあい文化に目をむけていくことは、現在さまざまな学問分野でおこなわれているコミュニケーション研究に対して、新たな研究領域の開拓やパースペクティブの発見をもたらしてくれるにちがいない。

参考文献

- アイブル＝アイベスフェルト、日高敏隆・久保和彦訳『愛と憎しみ・第2巻』みすず書房、1974年。
- 安達正嗣「E・ゴフマンの相互作用儀礼論をめぐって」『甲南大学紀要 文学編55 社会科学特集』、1985年。
- 安達正嗣「E・ゴフマン『島の社会におけるつきあい行動』の再検討」『ソシオロジ』（第101号）、1988年。
- 上野和男「交際（つきあい）」『日本を知る小事典 1 冠婚・葬祭』教養文庫、1979年。
- 小川了「物の贈答・言葉の贈答：その対応と差異」伊藤幹治・栗田靖之編著『日本人の贈答』ミネルヴァ書房、1984年。
- オルテガ・イ・ガセット、佐々木孝、アンセルモ・マタイス訳『個人と社会：《人と人びと》について オルテガ著作集5』白水社、1969年。
- 加藤秀俊『人間関係：理解と誤解』中公新書、1966年。
- ケンドン、A. & フェーバー、A. 佐藤知久訳「人間の挨拶行動」菅原和孝、野村雅一編『コミュニケーションとしての身体』大修館書店、1996年。
- Goffman, E., "Relations in Public: Microstudies of the Public Order," Harper & Row, 1971.
- E・ゴフマン、広瀬英彦、安江孝司訳『儀礼としての相互作用：対面行動の社会学』法政大学出版局、1986年。
- 菅原和孝、野村雅一編『コミュニケーションとしての身体』大修館書店、1996年。
- 鈴木孝夫『教養としての言語学』岩波新書、1996年。
- 多田道太郎『しぐさの日本文化』角川文庫、1978年。
- なだいなだ「こんにちはじいさん」『カベー氏はレジスタンスをしたのだ』集英社文庫、1978年。
- 野口武徳「しつけ」『講座・比較文化 日本の社会（第6巻）』研究社、1977年。
- 野口武徳、福田アジオ『約束』弘文堂、1977年。
- 野村雅一『しぐさの世界：身体表現の民族学』日本放送出版協会、1983年。

野村雅一『身ぶりとしぐさの人類学』中公新書、1996年。

柳田国男『毎日の言葉』新潮文庫、1993年。